

万博遺産

橋爪節也
Hashizume Setsuya

第8回

ローマの商業神、万国博に飛来す。
— 街角に跳躍するメルクリウス像



明治39年(1906)6月15日に発行された『大阪経済雑誌』の表紙。所蔵/大阪府立中之島図書館



大阪市役所旧庁舎会議室入口の横材「楯(まぐさ)」に刻まれた、たいまつ風の「カドゥケウス」。所蔵/大阪市立住まいのミュージアム



大阪マーチャンダイズ・マート(OMM)ビル前に設置された《メルクリウス》像。撮影/橋爪節也

右/「大大阪記念博覧会」ポスター。『大大阪記念博覧会誌』大正14年(1925)より。左/EXPO70イタリア館のパンフレット。提供/橋爪節也



EXPO'70の遺産には、未来都市を夢見させ、実用化されたテクノロジーだけではなく、歴史や記憶を再確認させ、街の活力を生み出すものがある。

欧米の「福の神」といえば、大阪では誰もが通天閣に祀られるビリケンさんを思い浮かべる。しかし、それ以前に渡来したのが、ローマの神メルクリウス(Mercurius)である。翼のある帽子とサンダルに、二匹の蛇が巻きつく翼のある杖「カドゥケウス」を持つ若者で、神々の使者の役割を担い、科学や商業の神として崇拜された。すばしっこいので泥棒にも信仰されたという。

大阪のメルクリウス受容は明治にさかのぼり、『大阪経済雑誌』の表紙を飾ったり、大正七年(一九一八)竣工の大阪市中央公会堂の屋根に、ミネルヴァとともに像が設置された(公会堂では「メルキュール」と表記)。

大阪市役所旧庁舎(一九二二年竣工)の会議室には「カドゥケウス」がデザインされ、大正十四年(一九二五)の「大大阪記念博覧会」のポスターにもメルクリウスとおぼしき青年が描かれる。大阪商科大学(後の大阪市立大学)の校章も、「カドゥケウス」の翼が市章の滲つ

くしとデザインされていた。

一九七〇年の大阪万博にこのメルクリウスが再来した。「大阪の斜塔」といわれたユニークな建築のイタリア館に、ローマのメデイチ宮殿の噴水用に制作されたジャンボローニャ(一五二九―一六〇八)の彫像《メルクリウス》(バルジェッロ美術館、フィレンツェ)が出品されたのである。同館パンフレット表紙にも、跳躍するその姿が描かれ、商都大阪を意識した展示品として選ばれたのかもしれない。

さらに万博から二年後の昭和四十七年(一九七二)、大阪市中央区天満橋にある大阪マーチャンダイズ・マート(OMM)ビルの三周年を記念し、同ビル南側に《メルクリウス》の複製像が設置された。

ビリケンさんが庶民の「福の神」とすれば、メルクリウスは西洋の王道を行く商業神であり、OMMビルの銘板には万博開催を意図し「商都大阪の飛躍発展と/その国際性と文化性の高揚を念じ/関係各位の協力を得て」と刻まれる。大阪に今も伝わる万博遺産であり、商都大阪の精神と活力を奮い起こさせる彫像として、見上げてもらいたい。

◆ 橋爪節也 (はしづめ・せつや)

大阪大学総合学術博物館教授、同大学院文学研究科兼任。1958年、大阪府大阪市生まれ。東京藝術大学大学院修了。大阪市教育委員会事務局文化財保護課、大阪市立近代美術館(仮称)建設準備室学芸員等を経て現職。専門は日本近世・近代美術史で、『橋爪節也の大阪百景』、『大大阪イメージ 増殖するマンモス/モダン都市の幻像』(創元社)など著書多数。ドラマの時代考証も手がける。